



輝石戦隊 キボンスジャー

戦隊ヒロインは
サキュバスの甘い罠で調教される

漂う淫靡な霧編



今、この青き地球は——。

突如として宇宙の深淵から飛来した、ヨドミガルドと名乗る地球外生命体の侵略にさらされていた。人々の営みは脅かされ、都市は炎に包まれ、希望すらも闇に飲み込まれようとしていた。

だが、その最前線に立ち、悪を討たんと輝きを放つ者たちがいる。

それこそが——我らが守護者、輝石戦隊キボンヌジャー！！

彼らの力の源は、ヨドミガルド襲来よりも以前、天を裂く閃光とともに落下してきた謎の隕石に秘められていた。そこから採取された未知の結晶——のちに“キボンヌストーン”と呼ばれるそれを、人類は叡智によって解析し、やがて超科学の装備“変身戦闘スーツ”を生み出したのである。

その技術を軸に組織は拡大し、輝石戦隊は世界各地に拠点を持つ国際防衛網へと成長していった。

今回の物語は、その中の——。日本支部A市基地に所属する男性四人女性一人で編成された戦隊メンバーの話である。

この日、輝石戦隊キボンヌジャーの五人は、ヨドミガルドの拠点アジトを攻略すべく、押し寄せる数百の戦闘員と死闘を繰り広げながら——。それぞれに手分けして、この場所を支配する女幹部サキュバスの居所を探していた。

ギインッ！ ガキインッ！ ザシュウッ！ ズバアッン！！

絶え間なく襲いかかる攻撃の渦中——。ひときわ異彩を放つ存在があった。

戦隊メンバー紅一点、キボンヌピンクこと“桜木奏”である。

その姿は、まるで舞う花卉のように軽やかでありながら、その手に握られたキボンヌサーベルは、閃光となって鋼の刃のごとき鋭さを放っていた。

シャキィィィイン！

「邪魔よ！ この程度の数で、私を止められると思って？」

戦場を駆け抜けるたびに、その豊満な胸は躍動し、しなやかな肢体が描く曲線は一瞬だけ戦場の残酷さを忘れさせるほどの艶美を飾っていた。

シュバッ！ ズバァッ！ ブシュッ！ ザシュウッ！ ズバァッン！！

「ギィィィィィィっ！！」

白刃の閃きが、戦場を駆け抜け——。キボンヌピンクがサーベルを振るうたび、鋭い光芒が残像を描くと、敵の戦闘員たちは次々と地へ崩れ落ちていった。

「女一人に群がるなんて、恥ずかしくないの？ その分、痛みもまとめて味わいなさい！」

さらに、キボンヌピンクが鋭く天を突くように伸びたピンヒールの踵で、大地を蹴ると——。

カッ！ カッ！ カッ！

火花が散り、烈風のような竜巻が生み出され、数十体の戦闘員がまとめて吹き飛ばされた。

ビュオオオオオッ！！ドガラガラガラァッ！！

ドゴオオオオ——ン！！

「フン、数ばかり揃えても無駄よ！　あなたたち全員、私のヒールの下で転がってなさい！」

彼女は、戦場のド真ん中を恐れを知らぬ足取りで、なおも突き進んでいった。

「この剣の前では、群れなんて意味を成さない！　結局は、力の差を思い知るだけよ！」

ズバァッ！　ブシュッ！　ザシュウッ！　シュバッ！　ズバァン！！

やがて、床には無数の戦闘員たちが折り重なるように転がり、断末魔すら消え——。戦場に、ひとときの静寂が訪れた。

「……ふう……やっと静かになったわね」

荒い息を吐きながら剣先を払ったキボンヌピンクの視線の先に——。突然、空気が歪み、まるで異界への口が開くかのように、禍々しい空間が姿を現した。

そこから漏れ出していたのは、淡く赤黒い妖光——。

血と淫欲を混ぜ合わせたようなその色彩は、無機質な廊下とは明らかに異質であった。

キボンヌピンクは、背筋を這い上がる粘つくような気配に全身を包まれ、戦隊スーツをも通り抜けるほどの悪寒に、肌を総毛立たせた。

「この先に、“奴” がいる……！」

奏は、その吐き出す空気を甘く湿ったものとして感じ、まるで見えざる手に頬を撫でられているかのような錯覚に囚われた。

「こんな妖気……挑発のつもり？ いいわ、望み通りに踏み込んであげる！」

本来であれば仲間の戦隊メンバーへ応援を要請し、冷静に作戦を立てるべき場面だった。

だが、幾人もの一般女性がすでにサキュバスの犠牲となっている事実が、奏の胸に燃える怒りの感情のまま……

彼女は、変身ブレスレッドに備わっている通信機を使うことを忘れ——。妖気渦巻く異質な空間へと足を踏み入れた。

ザッ…！

そこには——。女幹部サキュバスの玉座へと続くであろう、淫靡な気配を放っている長い回廊が奥へと続いていた。

「……この先が、本丸ってわけね！」

キボンヌピンクは、慎重に回廊を進んだ。

足音が石床に小さく響き、やがてその余韻すら霧散するかのように吸い込まれていくようだった。

「……静かすぎる。嵐の前の静けさってやつかしら」

キボンヌピンクが、そう呟いた矢先——。

ふと気づけば、辺り一面はいつの間にか妖艶な霧に包まれていた。

「なっ… いつの間に……！？ 霧が……！」

キボンヌピンクが歩みを進めた背後の景色は——。溶けるように霞み、前方には濃く甘い霧が揺らめいていた。

戦隊マスクの性能として、暗視／赤外線スコープなどの機能が備わっていたため、彼女の視界を遮ることはなかったが——。戦隊マスクの内部モニターが、赤く点滅した。

《Warning！ 未確認ガス成分検出》

《Attention！ 神経系に作用する成分を感知》

「えっ……！？ システムが反応してる……」

キボンヌピンク…桜木奏は、眉をひそめた。

通常、戦隊マスクは、どんな有害物質も遮断するはずなのだが——。彼女は、鼻腔に突き抜けるような甘い香りを感じたのだった。

「……っ！？ な、何？ この匂い……！」

予想外の異常事態に、奏は思わず声を漏らした。

鼻先から喉奥へ、そして血流にまで沁み込んでくるような甘美な芳香——。それは毒ではなく、むしろ媚薬めいた誘惑となって神経を侵し始めていた。

「なんだか、熱い……」

本来ならば戦隊スーツが自動で体温を制御しているにも拘らず、身体の奥から燃えるような熱がじわじわと湧き上がってくると——。彼女は、自分の中の“とある感情”に気がついた。

「……はあ……っ……なんで、こんな……」

そして、霧が濃くなり、世界そのものが、妖艶に感じる色に塗りつぶされていく中——。

「……っく……！ いけない…… はあ…… ここは敵のアジトなのに……」

戦闘用にピッタリと密着した戦隊スーツが、逆にその感情を増幅させ、敏感になった身体の曲線をなぞり立てているような感覚に……

奏は、胸の奥がジンジンと疼き——。スーツの下の素肌が“どうしようもない衝動”に襲われていた。

「いやあ…… こんな感覚…… 戦場で感じていいものじゃない……！」

それは、冷徹な戦士の理性を融かし、女としての肉体をじわじわと覚醒させていた。

「はあ… だ、駄目……っ…… はあ…♥ 気を…… しっかり持たないと…… はあ…♥ 」

奏の——。必死に己を叱咤する声は、震える吐息にかき消されていった。

「はぁ…♥ はぁ…♥ 落ち着くのよ… こんな事で負けてたまるもんですか…！」

そして、それは——。下腹部で脈動する衝動が止められず、膨れ上がり……

足を進めるたびに、そこが微かに脈打つのを感じてしまった彼女は、太ももをきつく閉じ、膝に力を込めて必死に堪えようとした。

「はぁ…♥ はぁ…♥ うう… なんで… こんな…… 私じゃない……！」

だが、そんな心の理性を無視するように、吐息は甘く震え——。

「はぁ…♥ はぁ…♥ くっ…… でも…… 身体が……！」

戦隊マスクの内側に反響する自らの呼吸すら、何か淫らなモノに聞こえてしまった奏は——。

思わずマスクを外し、汗に濡れてしっとり艶めく長い栗色の髪とともに——。熱に浮かされたように“甘く火照った顔”をさらけ出した。

「……っ、はぁ……あ……♥♥」

その開放感は、奏の身体に“すぐにでもこのスーツを脱ぎ捨てたい、という衝動を与えてきたが——。辛うじて踏みとどまる理性が、彼女をその一線から引き留めた。

「私は…… 戦うためにここにいる……！」

そんな状態の奏は、仲間に救援を求める事もしないまま――。

潤む瞳が揺らぎ、頬を朱に染め、吐息は甘い熱を震わせたまま……ただ、最初の目的である『サキュバスを倒す』という行動指針だけが、彼女を動かしていた。

「ああ……っ♡ 身体があ…♡ 勝手に…♡ 熱いい…♡ いやあ……っ♡
こ、こんなのお……♡ おかしい……っ♡」

すると――。回廊の奥、揺らめく霧の中から、ゆっくりと人影が形を帯び始めた。

「……っ！？」

そのぼんやりとした輪郭は――。やがて、女の姿へと変わり、淡い光に照らされながら艶めかしい肢体となっていた。

「！！！！」

それは、豊満な胸元と滑らかな腰の曲線を惜しげもなく晒し、長い髪をたゆたわせながら近づいてくると――。奏の目に映し出されたのは、艶やかな肉体を誇る女、淫魔サキュバスの姿だった。

「……っ！！ サキュバス……！！！」

彼女は、妖艶な笑みを浮かべ——。その瞳で、獲物を射抜くように奏を見つめていた。

「ふふ……震えているわね。いいのよ…… その身体も心も、今、あなたが感じているモノに委ねなさい」

【体験版おわり】